

白山ミュージアム

HAKUBUTSUKAN

CHIYOJYONOSATO HAIKUKAN

MATTO NAKAGAWA KAZUMASA KINEN BJUTSUKAN

MATTO FURUSATOKAN

ISHIKAWA RU-TSU KOURYUKAN

KURETAKE BUNKO

TORIGOE IKKOUIKKI REKISHIKAN



石川ルーツ交流館フロアガイド

石川ルーツ交流館が リニューアルオープンしました

平成十四年四月二十七日に、旧美川町の歴史や文化、繁栄のもととなった北前船、そして北前船が行き交った手取川の治水の歴史、手取川の自然などを紹介する施設として開館しました。

また金沢に設置されていた県庁が、県域の変更に伴い、明治五年に美川町に移設されました。県名もその時に金沢県から石川県となりました。当館は、県庁が置かれた跡地に建てられたことから、石川ルーツ交流館と名付けられました。

それから十七年目を迎える平成三十年に、改修工事を行い、十二月から「白山手取川ジオパーク」の拠点の一つとしてリニューアルいたしました。

今回の改修によって、「白山手取川ジオパーク」のテーマの一つとなっている「石の旅」について紹介する展示室を新設し、また美川町出身で大正時代に作家として活躍した島田清次郎を紹介するコーナーも新たに設けました。

(詳細記事 二ページ)

contents

- 石川ルーツ交流館 リニューアルオープン ・ 1
- 中川一政交友録 野上豊一郎・彌生子夫妻 8
- 女流俳人珈涼 一 千代女との親交 一 …… 4
- 鳥越城築城以前の山内の風景 …… 11
- 明治中期小学校の運営経費
- 平成31年度 前期行事予定 …… 12
- 一 松任町の場合 一 …… 6
- 平成31年度 文化施設行事予定等 …… 14

新しくなった 石川ルーツ交流館



玄関ロビーに設置されたオブジェ

平成十四年四月二十七日に開館した石川ルーツ交流館は、開館から十七年目を迎える平成三十年に改修工事を終了し、十二月からリニューアルオープンいたしました。これまで天井を彩っていた三本の

オブジェは平成十四年の開館にあわせ、前年に六年生だった美川・蝶屋・湊小学校の生徒が美川仏壇組合の方にご指導いただきながら、仏壇の技法で、絵を描いてもらったものです。左右の刺しゅうは美川中学校の生徒と刺しゅう教室の皆様にも作ってもらいました。細かい部分が見えにくいとの声もいただいておりましたので、玄関ロビーに設置し、より近くでご覧いただけるようになりました。

今回新たに天井を彩っているのは、美川に春を告げる「ふくさげ祭り」のお飾りです。美川商工会女性部の方が一つ一つ手づくりで作成してくださいました。手取川に遡上するサケや美川特産の糠漬け、粕漬で知られるフグ、縁起が良いタイやまねき猫などがモチーフとなっています。



「ふくさげ祭り」のオブジェ

リニューアルされた展示室

展示室1 「手取川流域の成り立ち」

では、これまでも何度も氾濫してきた手取川に挑んできた治水の歴史を紹介しています。その中でも特に昭和九年の手取川大洪水での災害の様子を紹介してきました。

今回新たに「白山手取川ジオパーク」を紹介する拠点の一つとして、手取川流域の様々な地形を取り上げて展示しています。

白山から、手取川・日本海へと流れる雪解け水が、砂利や石を運ぶことによって、作り出される地形の特徴を写真や地質図などでわかりやすく解説しています。

展示室2 「手取川流域の豊かな生きものたち」では 手取川を上流・中流・下流のエリアに分けて魚・鳥・植物などを紹介しています。



手取川流域の多様な大地の成り立ち

展示室3 「手取川流域の大地をつくる石そして恵み」

では、これまで紹介されていなかった手取川流域の大地を構成する岩石を紹介しています。

手取川流域の人々になじみ深い「玉石」をはじめとして、手取川流域で見かけられる8種類の岩石の特徴やどのようにして出来たのかなど

が説明されています。また見るだけでなく、岩石に触れられるようになっていたのでより違いが感じられます。



展示室3「手取川流域の大地をつくる石 そして恵み」

「石川のルーツ館」では、開館時に設置されていたQ&A「美川ものしりクイズ」が復活しました。ぜひ挑戦してみてください。

「名誉町民顕彰室」では、旧美川町の唯一の名誉町民賞を受賞した、美川町出身の奥田敬和氏を紹介してい

ますが、今回あらたに大正時代作家として活躍した島田清次郎を紹介するコーナーも出来ました。

島田清次郎

島田清次郎は、明治三十二年に美川町で誕生しました。回漕業を営んでいた父が幼い時に亡くなり、母の実家で暮らしました。祖父が事業で失敗し、中学の時には伯父の世話を受けていました。伯父の勧めにより、金沢商業高校本科に転校、親友橋場忠三郎の影響を受け、小説を書き始めます。高校を退学となったことで、伯父から見放され、極貧の生活をおくりながらも小説を書き続けました。清次郎の優秀さに目を掛けていた松任明達寺の暁鳥敏が、『中外日報』を主催する真涙涙骨に紹介します。送られてきた小説を読んだ真涙涙骨は粗削りながら、十八歳の若さで書かれた小説の才能を認め、掲載が決まりました。一時は、中外日報の記

者として採用されますが、すぐに退社することになります。

その後、上京した清次郎は、出版社に紹介してもらおうと生田長江のもとに日参します。根負けするように作品を手にとった長江ですが、読後は新潮社から出版するように推薦してくれました。

大正八年、若干二十歳が書いた自伝的小説『地上』は発売されると、生田長江の賛辞が新聞に掲載されたこともあり、爆発的な売り上げとなります。清次郎は一躍、ベストセラー作家となりました。

もともと自信家で傲慢だった清次郎は、小説が売れるにつれ、ますます尊大になり、眉をひそめる人も少なくありませんでした。

大正十二年四月にスキヤンダルが紙面に掲載されると、これまでの傲慢な態度から、あつという間に文壇から黙殺されます。

それからしばらくして梶鴨にある

精神病院に入院し、昭和五年三十一歳で亡くなりました。出身地である美川でも知る人が少なくなってきたが、昭和三十二年『地上』が大映から映画化されると島田清次郎の名も再び知られるようになってきました。

島田清次郎を紹介するには、まだまだ小さいコーナーですが、少しでも多くの方に知っていただける場となればと思っております。

(石川ルーツ交流館 早松由起子)



島田清次郎を紹介しているコーナー

女流俳人珈涼 — 千代女との親交 —

千代女と並び称された加賀国の代表的な女流俳人、金沢の坂尻屋珈涼（二六九六〜一七七二）について紹介します。

珈涼の生涯

珈涼は加賀国金沢の人。坂尻屋八郎右衛門（俳号百雀、五々）の妻。別号に艸婦人、金城一婦。剃髪後は珈涼尼とも称しました。坂尻屋は元々は石川郡坂尻村（現在の白山市坂尻町）の出自で、慶長年間頃に金沢に移り住みました。

一六九六（元禄九）年、町年寄役の喜多村彦右衛門の長女として生まれました。父彦右衛門は雪翁の号を持つ俳人であり、幼少時より父から俳諧の手ほどきを受けたものと思われま。後に、伊勢派の暮柳舎（和田）希因に師事。一七五〇（寛延

三）年の希因没後は、加賀俳壇の核心を担う俳人として活躍しました。

一七三二（享保十七）年上梓の犀川口歳旦帖には珈涼らの三物が掲載されています。

一七四八（寛延元）年、夫の八郎

右衛門と死別します。翌一七四九

（寛延二）年の秋、珈涼は四カ月に

渡って越中を旅し、その道程で加越

の俳人たちと交流を結びました。後

にその時の様子を、紀行文『渡り

鳥』として纏めています。一七五三

（宝暦三）年に嫡男が没すると、養

子として最上屋の倅で大鼓役者の佐

六（本名勝道、後の初代飯島六之

左）を迎え、娘婿として家を継がせ

ました。一七六〇（宝暦十）年九月、

越中井波瑞泉寺の親鸞上人五百回遠

忌に参詣。翌年には千代女と共に、

京都東本願寺の五百回遠忌にも参拝

しています。

この当時の本には、「千代尼、珈涼尼巧者の聞えあり、北国益々麦林盛の時也」との記述があり、千代女と並んで珈涼が同等に評価されていたことが窺えます。この二名に、越前三国の哥川女を加えて、北陸の三女性俳人として当時から高く評価されていました。また、珈涼は俳画も

数多く手がけていて、現存する珈涼

作品の大半は自画賛の俳画軸であり、

珈涼作品の特徴ともいえます。一般

的に男性的な筆致のものが多く、ま

た書画には薄墨を用いています。珈

涼作の句数は現在までに、約二〇〇

句弱が確認されています。

一七七二（明和八）年十一月二十五日没。七十六歳。



▲珈涼肖像画『俳諧百一集』より

珈涼と千代女

珈涼は千代女より七歳年上でしたが、一七七二（明和八）年に珈涼が亡くなるまでの間、二人は終生交流を持ち続けました。

大河蓼々著『千代尼伝』や城丸章著『千代尼』などの書籍には、千代女は幼い時喜多村家に奉公し、そこで喜多村雪翁から俳諧の手ほどきを受けたとの記述がありますが、このことを確実に示す史料は現在未確認です。また、千代女研究家の中本恕堂は、この件について著書『加賀の千代全集』などに記述がなく、千代女は幼少期に北潟屋大睡のもとで俳諧を学んだとのみ記しています。これは恐らく、恕堂が喜多村家での奉公の事実を史料から確認できなかったためと考えられ、現時点では喜多村家奉公説は推測の域を出ません。

千代女には俗説に付与された誤認句が数多く存在しますが、その中に

「朝顔や男結の上に咲く」の句があります。これは珈涼作の句「夕顔や男結の垣に咲く」が変形して、千代女の作として拡散していったと考えられます。また、俳人で画家の小松砂丘は、山森青硯著『坂尻屋珈涼』の中で、「千代尼は画は描いていないと極言」しています。確かに珈涼と千代女の合作軸が現存するほか、千代女自画賛とするものの一部に珈涼の作風を感じるものが存在していますが、珈涼没後も千代女の俳画制作に特筆すべき変化は感じられないことから、千代女の俳画制作には珈涼の作風による影響が一定程度存在していたとする方がより自然です。

一七六一（宝暦十一）年に珈涼と千代女は、京都の東本願寺に参詣、また、千代女の珈涼宛書簡の中でも両者の親しい関係が窺われるほど、二人は同門もしくは親友として、長く深く親交を重ねていたことは間違いないと見られます。逆にこのことが、千

代女の盛名が高まるに従い、珈涼と千代女の事績が混同されていく原因に繋がったと考えられます。

珈涼の創作活動の変遷は、千代女と比較して、研究が進んでおらず、今後の進展が待たれます。

参考文献

- 『坂尻屋珈涼』 山森青硯
- 『江戸期おんな考 千代女の陰に隠された坂尻屋珈涼「渡り鳥」』 皆森禮子
- 『大鼓役者の家と芸—金沢・飯島家十代の歴史—』 長山直治、西村聡

（千代女の里俳句館 山下法宏）



▲西瓜図珈涼自画賛「つめつくは」横幅（個人蔵）

明治中期小学校の運営経費

— 松任町の場合 —

白山市立博物館に明治二十五年度から明治三十年頃の「松任町歳入歳出精算書」（決算書）等の財政関係の史料が所蔵されています。特に明治二十七年は歳出費目の領収書が残されており詳細な内容を知ることが出来ます。これをもとに明治中期の松任町における小学校運営を経費面からみてみたいと思います。

明治前期松任町の小学校

はじめに「松任小学校沿革史 甲」から松任小学校草創期の歴史についてふれてみたいと思います。

明治五年（一八七二）九月、松任町 三好亘、岡本新太郎の両名が首唱して西新町 斎藤何某の家屋を借り上げ松任小学校と称して開校しました。明治六年、西隣に校舎を新築移転し、内部を区画して松任女兒小

学校を設けます。明治八年、斎藤何某宅地を買収し、校舎を新築、男児の校舎に使用することとして従前の校舎は女兒が使用し、明治六年建築の校舎であることに因み、校名を明六小学校に改称しました。明治九年八月、予科を設け、明治十二年六月悪疫の流行等により一時閉校となりました。明治十四年から明治二十年ごろまで松任小学校、明六小学校ともに初等、中等、高等の三科を設置。この頃の通学区は松任町全域と成村でしたが、明治十六年七月、北安田小学校が設立され、成村は通学区域から外れました。明治二十年、高等科、尋常科、簡易科を併置します。簡易科は西新町に民家を刈り上げ使用することとし、同年九月、幼稚園を設立したものの一年程で廃止、明治二十四年には簡易科も廃止してい

ます。明治二十五年には松任高等学校、松任尋常小学校と称して同じ校舎を使用していました。

松任町教育費（經常費）の状況

明治中期の松任町教育費について、まずは歳入からみてみると小学校授業料と委託報酬金、教育寄附費が主な教育関係の収入で不足分は町税でまかなわれていたと考えられます。

授業料は明治二十五年には、尋常小学校生徒一人につき一か月五銭、高等小学校では生徒一名につき一か月十五銭。一家に二名以上が在籍する場合は年長の児童は全額で、その他の児童は半額、納期は毎月五日となっていました。物品や労働で授業料を代納することも可能でした。また納税状況に応じた軽減措置等もありました。「松任小学校高等科授業

(表1) 松任町歳入歳出精算額(決算額)のうち教育の割合 (単位:円)

年度	經常費計	教育費	經常費の内 教育費の割合	教育費の内 人件費の割合	歳入の内經常費 教育費に係るもの	教育費に 対する割合
M25	2,721,966	1,503,656	55.242%	89.916%	748,956	49.809%
M26	3,254,828	1,661,381	51.044%	83.618%	737,059	44.364%
M27	3,124,321	1,608,138	51.472%	88.632%	897,501	55.810%
M28	3,402,462	1,614,239	47.443%	89.076%	893,963	55.380%
M29	3,767,673	1,659,625	44.049%	88.298%	998,538	60.234%
M30	3,720,612	1,800,445	48.391%	92.396%	1,851,348	102.827%

※「松任町歳入歳出精算書」(決算書)等により作成。

(表2) 松任町教育費関係清算額(決算額) (単位:円)

歳入	M25	M26	M27	M28	M29	M30
小学校授業料	609,006	601,304	734,403	774,413	887,788	904,912
委託報酬金	77,150	77,150	68,750	68,750	68,750	68,750
教育費寄附金	62,800	58,605	76,348	50,800	42,000	877,686
教育基本金	140,426	—	—	—	1,773,891	—
教育積立金	—	—	—	—	650,000	—
合計	889,382	737,059	879,501	893,963	3,422,429	1,851,348
經常費相当額	748,956	737,059	879,501	893,963	998,538	1,851,348

(經常費)

歳出	M25	M26	M27	M28	M29	M30
高等小学校費	714,599	705,618	707,000	708,200	707,540	832,533
(内訳) 校長給料	—	—	—	—	180,000	204,000
教員給料	600,000	600,000	600,000	600,000	386,900	515,333
雑給	44,990	45,618	47,000	48,200	52,300	63,600
校費	69,609	60,000	60,000	60,000	88,340	49,600
尋常小学校費	755,367	779,779	818,341	820,115	905,714	944,327
(内訳) 教員給料	650,240	684,472	716,859	716,387	771,543	788,765
雑給	45,995	48,000	50,120	54,000	60,926	78,200
校費	59,132	47,307	51,362	49,728	46,800	49,581
修繕費	—	—	—	—	26,445	27,781
修繕費	17,918	132,834	41,246	34,046	—	—
恩給基金	10,803	11,122	11,338	11,513	12,105	13,645
賞与費	4,969	7,165	1,490	9,780	2,615	6,700
儀式費	—	9,863	13,813	14,830	10,892	3,240
補助費	—	15,000	14,910	15,755	18,900	—
奨励費	—	—	—	—	1,859	—
合計	1,503,656	1,661,381	1,608,138	1,614,239	1,659,625	1,800,445

※「松任町歳入歳出精算書」(決算書)等により作成。歳出のみ經常費・臨時費に分かれている。

(表3) 明治27年度松任町経常費歳出教育費校費内訳

No	品名	支先(住所)	領収日	金額			
				金	額		
				円	銭		
1	『対外軍歌』代等	不明	M27.12.28	33	5		
2	色紙	金沢力	M27.7.3	16	5		
3	印刷費	松任町字殿町	M27.10.25	1	21		
4	印刷費	松任町字殿町	M27.12.28	65			
5	運動会用提灯15個	学校	M27.11	21			
6	絵具罐他5品	学校	M27.6.23	18			
7	大棒形朱5挺	金沢市新野町3丁目	M27.10.15	25			
8	化学機械直し料	大分県北海部郡丹生町	M27.6.12	20			
9	薬品代	松任町字八日市町	M28.4.4	19			
10	学校テーブル腰掛等直シ木釘作料	松任町	M27.6.25	2	62		
11	金物	松任町字中町	M27.11.9	91	5		
12	紙白棒等代	松任町字八日市町	M28.4.12	2	85		
13	紙代	松任町字中町	M27.11.9	1	81		
14	紙代	松任町字中町	M28.4.4	1	4		
15	硝子板代	松任町字中町	M28.7.11	43			
16	教師用尋常終身掛1部	松任町字四日市	M27.6.2	70			
17	郷土史談3部	学校	M27.10.	16	8		
18	桑葉代	松任町字殿町	M27.8.2	20			
19	コウケ等品々	松任町字西新町	M27.11.9	45	9		
20	高等小学校職員集会会場費	不明	M27.11	20			
21	小羽板代	不明	M27.11.9	1	25		
22	御料紙代	金沢市片町	M27.8.5	1	8		
23	実業新用文	金沢市片町	M27.6.3	25			
24	不明	不明	M27.11.12	13			
25	不明	松任町字中町	M27.11.12	2			
26	不明	松任町字西新町	M27.11.12		3		
27	不明	松任町字八日市町	M27.11.12	3	97		
28	不明	松任町	M27.11.9	2	78		
29	不明	不明	M27.11.9	48			
30	不明	不明	M27.11.9	6	5		
31	不明	松任町字四日市町	M27.11.9	4	1		
32	不明	不明	M27.11.9	34	5		
33	不明	不明	M27.11.9		4		
34	不明	松任町字東二番町	M27.11.13	9			
35	不明	不明	M28.4.10		6		
36	不明	松任町字中町	M28.4.10	14	4		
37	不明	松任町	M28.4	1	65		
38	嶋小座巻板代	松任町字中町	M27.11.13	13	5		
39	宿直夜具洗濯賃	不明	M27.12.28	14			
40	手芸物共進会出品駄賃	松任町字西新町	M27.7.19	26			
41	朱墨	金沢市越中町	M27.9.10	30			
42	朱肉直し等代	金沢市新立町3丁目	M28.2.27	38			
43	朱墨	金沢市越中町	M27.6.21	20			
44	錠	松任町	M27.11.13	7			
45	錠の鍵	松任町字西新町	M27.6.13	1	8		
46	書籍代	金沢市安江町	M27.9.24	5	90		
47	真竹1本	中奥村字倉光	M27.9.29	16			
48	炭6俵	館畑村字行町	M27.6.7	1	35		
49	炭	館畑村字行町	M27.6.22	1	32		
50	炭7俵	館畑村字行町	M27.7.7	1	54		
51	炭	松任町字西新町	M27.7.31	49	2		
52	炭12俵	館畑村字行町	M27.8.10	2	64		
53	炭13俵	館畑村字行町	M27.7.12	2	86		
54	炭15俵	不明	M27.11.14	3	60		
55	炭15俵	不明	M27.11.16	3	60		
56	炭7俵	館畑村字行町	M28.3.11	1	68		
57	炭8俵	館畑村字行町	M27.10.12	1	92		
58	炭8俵	館畑村字行町	M27.10.22	1	92		
59	炭8俵	館畑村字行町	M27.12.10	1	92		
60	炭代	不明	M27.11.12	3	12		
61	卒業証書等	金沢市野町	-	6	10		
62	竹1本	倉光	-	16			
63	竹2本	松任町字辰巳町	M28.1.22	50			
64	墨替替え3丁	松任町字辰巳町	M27.3.5	1	20		
65	筆筒	松任町字八日市町	M27.9.3	1	40		
66	筆筒直し代他 御品代	松任町字八日市町	M28.	3	37		
67	茶碗等	松任町字中町	M27.9.7	56			
68	手桶入物	松任町字四日市町	M27.11.9	30			
69	展覧会会場費	不明	M27.11	12	5		
70	時計直し代	金沢市石浦町	M27.11	42			
71	時計直し代	金沢市石浦町	M27.11	20			
72	縄代	不明	M27.11.9	1	6		
73	人足7人雇料	松任町字東新町	M27.11.29	1	85		
74	人足力	松任町字東新町	M27.6.5	42			
75	鏡目立代	松任町字横町	M27.6.27	16			
76	糊代	松任町	M27.12.4	5			
77	函	松任町字八日市町	M27.9.3	25			
78	函・蓋	松任町字八日市町	M27.9.3	70			
79	筆7対	金沢市越中町	M28.3.21	21			
80	墨墨朱代	金沢市新立町3丁目	M28.2.25	1	4		
81	和筆20対	金沢市越中町	M27.5.10	45			
82	古新聞代	松任町字八日市町	M27.12	40			
83	ベースボール用根棒	学校	M27.11	5			
84	ホウケ等代	松任町字西新町	M28.4.4	43	8		
85	ボール、人足賃	金沢市広坂	M27.10.23	26			
86	ホルド掛	金沢市野町	-	20			
87	折本代	不明	M27.11.9	53	8		
88	マイ籠、イコ	松任町字東一番町	M27.8.13	13			
89	真竹	松任町字辰巳町	M27.11.9	14	5		
90	松任学校用手提灯2個張替	不明	M27.2.7	34			
91	木銃等修繕費	学校	M28.6	24	50		
92	薬品代	松任町字八日市	M27.11.9	16	8		
93	屋根板	松任町字西新町	M27.10.6	1	20		
94	理科新書1部	松任町字四日市	M27.6.2	49			
95	料理筆墨代	学校	M27.11.10	30			
96	ロウソク30丁	学校	M27.11	6			
合				計	111	36	2

※明治27年度松任町教育費領収書綴」により作成

料決算表」によると明治二十六年の授業料徴収状況は五月の高等科授業料総額は三十五円五十五銭で納入額が三十三円二十五銭、収納率は九三・五パーセントです。このとき高等小学校の在籍者は一七七名(男子一五三名、女子二十四名)で単純に十五銭をかけると二十六円五十五銭となり、徴収金額は約一・三四倍にもなりますが一家分を纏めて最年長の生徒が納入するためです。尋常科授業料総額は十七円十五銭、納入金額十六円三十七銭五厘で、収

納率九十五・五パーセントでした。尋常小学校の在籍者数は四三九名(男子二六一名・女子一七八名)となっていました。委託報酬金は近隣村より通学する児童分分担金のなもの、教育基本金と教育積立金は臨時費的なものと考えられます。次に歳出をみてみましょう。松任町経常費教育費決算額を記したのが(表2)です。この頃、教育費は経常費の五十パーセントほどで教育費のうち人件費が九十パーセント程度(表1)になっていました。明治

二十七年「経常費精算表」(決算書)の附記によれば高等小学校費は正教員四名(十五円一名、十二円二名、十一円一名)の給料が支出されています。また尋常小学校費の給料は正教員五百三十三円八十銭、准教員俸給百八十三円五銭九厘と記され、それぞれの総額と考えられます。人件費のほかは校費、修繕費(大工作料等)、賞与費(賞品等)、儀式費(天長節学校花門等)、補助費(修学旅行補助)、奨励費の費目が見られます。校費(表3)は校舎維持経

費以外の諸経費と考えられます。明治二十七年の領収書を見ると消耗品、燃料費等の需用費的なものが多く、特殊なもの以外は学校近辺の商店等から調達していたことがわかります。また朱墨や筆は金沢から調達し、燃料の炭は館畑村字行町(現白山市行町)から調達していました。支出品名や支出先が不明のものも多くありますが白山市域において明治中期の小学校経費が詳細にわかる数少ない事例と言えるでしょう。(白山市立博物館 村上和生雄)

中川一政交友録 野上豊一郎・彌生子夫妻

松任中川一政記念美術館では、白

山市ゆかりの画家・中川一政（明治

二十六年（一八九三）―平成三年

（一九九一）、文化勲章受章者）の作

品研究だけでなく、一政と縁があつ

た人々との交友を手繰ること、そ

の人となりやバックボーンに迫りた

いと調査を行なっています。

本稿では、野上豊一郎（のがみとよいちろう）（英文学者、

能楽研究者、法政大学総長、明治

十六年（一八八三）―昭和二十五年

（一九五〇）・野上彌生子（やえこ）（本名

ヤエ小説家・文化勲章受章者、明

治十八年（一八八五）―昭和六十年

（一九八五）夫妻を取り上げ、平成

三十年開催の「生誕125年 中川

一政展―ひねもす走りおおせたる者

―」（九月八日―十一月二十五日）

で紹介した作品・資料や調査結果を

交えて紹介します。

野上夫妻との出会いと縁

一政と豊一郎の出会いは一政の旧

制中学時代に遡ります。一政が東京・

神田錦町の錦城中学校（現錦城学園

高等学校）三年生の時（明治四十二

年）、同校に英語を教えに来たのが、

当時東京帝国大学を卒業して法政大

学の講師になったばかりの豊一郎で

した。一政十六歳、豊一郎二十六歳

の頃です。豊一郎は、一政が中学卒

業後しばらく通ったドイツ語専修学

校にも英語を教えに来ていました。

そんな豊一郎を兄のように慕って

のことでしょうか。一政は二十代に

画を描くようになると、作品を見せ

に当時駒込にあった豊一郎の家を訪

れています。その妻が彌生子です。

彌生子は既に明治四十年（一九〇七）、

『ホトトギス』に短編「縁」を發表

して文壇デビューし作家として活動
していました。その後、野上夫妻が
田端へ転居してからも一政は時折訪
ねています。

夏目漱石門下である豊一郎を通じ

て、芥川龍之介や安倍能成（哲学者、

文部大臣）らと見知るようになった

一政は、彼らの多くが能楽を嗜んで

いたことから能に親しむようになり

ます。漱石の謡の師は宝生新（下掛

宝生流十世宗家）であり、彌生子や

安倍も宝生流を嗜んでいました。ま

た、一政の最初の能楽鑑賞を世話し

たのは、彼の支援者の一人、野島

康三（写真家）ですが、野島は宝生

流の従兄弟にあたります。こうした

ことから、一政が親しんだのも宝生

の能と考えられ、一政の幅広い交友

関係の一端を野上夫妻がつかないだ

ともいえます。

そして、大正十二年（一九二三）、

一政は伊藤暢子と結婚しますが、そ

の仲人を務めたのはほかでもない野

上夫妻でした。豊一郎は法政大学で
教授になっており、彌生子も初期の
代表作ともいえる『海神丸』
（一九二二年春陽堂）を發表した頃
です。そして数十年後、一政の長女

桃子と原保美（俳優）夫妻の仲人

も野上夫妻が労を取っています。ま

た更に後には、一政の甥のもとへ野

上夫妻の孫が嫁ぐという縁が生まれ

ています。

野上夫妻を慰めた

一政の「花鳥画」

昭和八、九年（一九三三、三四）、

豊一郎が教授を務める法政大学で学

内紛争、いわゆる「法政騒動」が起

こります。八年十一月、当時学監・

予科長でもあった豊一郎の排斥運動

が表面化し、九年十二月には解職さ

れます。（後に復職し、昭和二十一

年に第六代学長、二十二年に第七代

総長に就任し、戦後の法政大学の再

建を担う。）そうした騒動の渦中で

憔悴していた野上夫妻を慰めたのは、ほかでもない一政の画でした。一政が野上夫妻へ、自作を貼り交ぜ仕立てた屏風を贈ったことが彌生子の日記に記されています。

○昭和九年七月七日 土

晴 夕方久しぶりの雨

(略) 夜中川一政夫妻来訪。いつか頼んだ屏風の絵をもつて来てくれたのである。彼が花鳥を描いたのははじめてさうな。けしの花と、かきつばたと、朝が兎と、ばらと、青い柿。——美しい色を使つて、一政の画としてはまれに見るケンランたるものである。(略)

これによると、一政が夫妻のために描いた画は、芥子、杜若、朝顔、そして薔薇と柿。殆どが伝統的な日本画の画題です。彌生子が「一政の画としては稀にみる絢爛たるもの」

と評した「花鳥画」とはどんなものだったのでしょうか。

それからおよそ四十年後の昭和四十七年(一九七二)五月二十五日の彌生子の日記には、この屏風の五枚の画を一点ずつ掛物にしたことが記されています。「こんな花の絵は彼としてははじめての揮毫。法政事件について苦悩の多かつた私への見舞の意味もあつたらしい。」と振り返っています。この時、五つに分けられ軸装された内の一つが図1の「薔薇」です。

現在確認できるこの「薔薇」を観てみると、墨で引いた輪郭線の中を淡彩で着色し、花の姿かたちに従順に仕上げられています。一政の戦後の画風である豪胆な筆致に鮮やかな色彩、そして写実を超えた主観的表現の魅力とは趣を異にします。

この画を描いた当時の一政は四十一歳で、山を遠望する風景画に

取組み、独自の画法、生きた筆致を模索している時期です。しかし、彼はそうした自己の工作上的奮励を一時脇に置いて、夫妻の境遇をおもんぱかりこの画を描いたように思われてなりません。朝顔などほかの四つ

の画の所在は未だ調査中で想像するしかありませんが、「花鳥画」が散りばめられた当時の屏風は、穏やかな優しさを湛え、野上夫妻を励ましたことが想像されます。

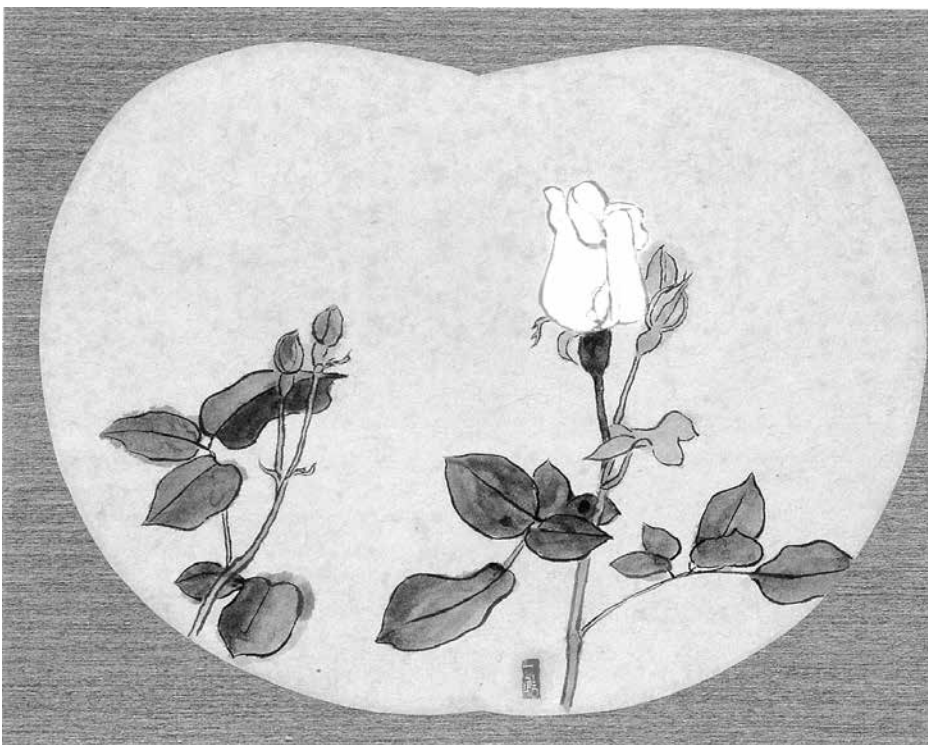


図1 中川一政画 薔薇 1934年/27.0×37.7cm/墨・淡彩/紙、軸装
野上彌生子旧蔵品/個人蔵

彌生子著書を一政が装丁

彌生子の数多い著書の幾つかは、一政の装丁によるものです。その初めは『妖精圈』（一九三六年 中央公論社）で、先述の花鳥画から約二年後のことです。表紙は木版四色刷から起した贅沢な作りで、その原版画が図2「『妖精圈』表紙画」です。表紙側（図2左半分）には蕾の薔薇、裏表紙側（同右半分）の大きな花卉



図2 中川一政装丁原画
野上彌生子『妖精圈』表紙画 1936年
237×332cm / 深澤索 木版彫刻、刷り
／個人蔵

は杜若でしょうか。先の花鳥画の内
の二点と重なります。

このほか、『藤』（一九四一年 甲
鳥書林）、『山姥』（一九四二年 中央
公論社）、『昔がたり』（一九七二年
ほるぷ社）、『秀吉と利休』（一九九〇
年 中央公論社 特装限定版）などが
一政の装丁です。

彌生子から一政に宛てた書簡
（一九七二年十二月二日付・消印）
にこうあります。「―「ほるぷ」の
さしゑの御礼を申し上げ度く筆をとり
ました。馬子にも衣装とは申します
が、あの立派なさしゑはぶきりよう
な娘が晴れ着をきたやうでいつそう
まづい顔を目だたせるおもひあり、
また勿体ない事かなとも感じさせま
す。ありがたうございました。―『昔
がたり』の挿画の礼状と見られます。

野上彌生子「秀吉と利休」は昭和
三十七年（一九六二）一月から翌年
九月まで『中央公論』で連載され、
この作品で彌生子は三十九年に第三

回女流文学賞を受賞。彌生子の代表
作の一つとなる同作は彼女の没後五
年を経て平成二年に一政の装丁・題
字による特装版として限定三八〇部
が刊行されています。

生涯に及ぶ付き合い

戦後になると一政と野上夫妻は、
画家、学者、文筆家とそれぞれの世
界の第一線で活動し、頻繁な行き交
いは多くありません。それでも、互
いの活躍を喜び合い、本や手紙を送
り合う関係が続いたことが、交わさ
れた書簡などから窺えます。

一政は彌生子の著作名であり、北
軽井沢の山荘で執筆していた彼女の
あだ名でもある「山姥」を銘にした
茶碗（図3）を彌生子に贈っていま
す。毎朝のマドレーヌとこの茶碗で
飲む抹茶が彼女の朝食でした。また、
一政の述懐には「私が御無沙汰して
ゐると云ふと『いつでも逢へるとお
もつてゐるだけでよい』とあべこべ



図3 中川一政茶碗 銘 山姥 1970年頃 口径11.0×高さ7.5cm
野上彌生子旧蔵品／個人蔵

にいはれてしまふ。」（野上夫人の
こと）『図書』一九八〇年六月号）
とあり、「君子の交わり」の様子が
浮かび上がります。

（松任中川一政記念美術館

徳井静華）

参考文献『図書』一九八〇年6月号 岩波書
店／『中川一政ブックワーク』一九八四年形
象社／『野上彌生子全集』第II期第4・17巻
一九八七・九〇年 岩波書店／『野島康三作品と
資料集』二〇〇九年 渋谷区立松濤美術館／宮
永孝「昭和8、9年の「法政騒動」―「社会志林」
59巻4号 2013年 法政大学社会学部学会

鳥越城築城以前の山内の風景

永正三年（一五〇六）秋、大日川

下流域山内若原（白山市若原）に

新たな風景が加わったようです。八

月、三十万を豪語し越前へ攻め入っ

た加賀一向一揆が九頭龍川の合戦で

一敗地にまみれます。

勝利した朝倉氏は越前の真宗寺院

を悉く破却し、坊主衆は追放され、

次々と加賀へ浪人します。荒川興行

寺蓮堯法師は山内若原の地を選びま

した。

永祿十二年（一五六九）加賀越前

和睦がなつて蓮堯の息蓮恵法師が越

前荒川に帰還することになります。

かくて興行寺が若原御坊として半

世紀余り若原の地にあったにもかか

わらず、一部の人々を除いて一般に

はあまり知られていません。鳥越城

前史の風景として「若原御坊」を紹介

する夏の小さな企画展（平成三十年

七月末から九月末）を開催しました。

興行寺が若原の地を選んだ理由は、

血縁にひかれたといわれています。

波佐谷松岡寺、藤島超勝寺が特筆さ

れます。蓮堯の母は松岡寺蓮綱の妹、

室は蓮如の孫、祖母は超勝寺玄慶娘

であったといえます。結果として山

内の中心地にもう一つ一家衆寺院が

寺基を構えることになります。武將

として力を付ける鈴木出羽守ら二曲

一族の屋敷と背後の詰め城と若原

御坊が別宮の風景として見ることが

できます。鳥越城はまだありません。

若原地区には「ゴボヤマ（御坊山）」

「ゴボノウラ（御坊の裏）」という小

字名が伝えられています。この地名

からも「御坊」の存在を知ることが

でき、「若原御坊」をこの地と比定

できます。鳥越村時代の調査で「甕」

が発掘され、その中に「硯」があっ

たと記録されています。享祿二年

（一五二九）この地で亡くなったと

される興行寺蓮堯法師ゆかりの物で

はと探しましたが、行方を確かめら

れず展示紹介は叶いませんでした。

越前の荒川興行寺は交通の要衝に

土塁と濠に囲まれた城郭寺院（百m

×二百m）であつた

らしく、さらに超勝

寺が江沼郡塔尾に構

えた空堀と土橋、二

重の土塁の堅固な繩

張りは城郭と言つて

いいでしょう。その

視点で考えるとする

なら若原の背後の山

に城郭寺院を築いて

いたのではと期待で

きそうです。

昨年十二月と平成

三十年四月、二度に

わたって歩く機会に

恵まれ現地を踏査す

ることができました。九十九折れの

山道を極める（標高三百mから四百

m）と切通があります。周囲には人

工的な平坦地や土塁と見ることがで

きる高みを見るとき柵や櫓を造作す

れば立派な要害になります。道は小

松へも通じるといい、交通を扼する



荒川興行寺山門、志比忽坊の扁額がかかる

ことができます。正確には今後の調査を期待するところです。

綽如上人の次男が超勝寺、三男周覚上人が興行寺を開基します。

享祿四年の錯乱（加賀一向一揆内乱）の時、超勝寺が山内の地に立て籠もったのもそうした縁を考えます。むろん興行寺は大一向（超勝寺・本願寺）に与したと思われまゝ。実際の武力は鈴木出羽守ら山内衆が大一向を支えたようです。

永祿十二年朝倉氏との和睦が成って越前諸寺が越前へ帰還し、織田信長との元亀天正の戦いが始まります。山内中心部の風景は若原御坊に代わって鳥越城がその姿を現すこととなります。

国指定史跡鳥越城築城は、本願寺が信長と全面戦争に入った元亀元年の頃といわれます。

（鳥越一向一揆歴史館運営委員

西出康信）

平成31年度 前期 行事予定

松任中川一政記念美術館
2019春季テーマ展
中川一政 薔薇とマジヨリカ陶器

3月9日(土)～6月2日(日)

中川一政が生涯に描いた〈薔薇〉は800点を超えますが、一つとして同じ〈薔薇〉はなく、描き慣れた画題をなぞる情性もありません。愛用の壺に自ら花を生け、日々感動を新たに、昨日の自分を超えようと筆を執り続ける姿勢がそこにはあります。

そして、この薔薇の画に多く描かれたのが、マジヨリカの壺です。一政が蒐つめ、愛用したもので、16世紀頃、主にイタリアで作られた色鮮やかな陶器です。生命感豊かな薔薇に負けない存在感をたたえるマジヨリカの壺は、画面の中で花と拮抗し、動きと絶妙のバランスを生んでいます。画にどう生かされたか、実物と共に紹介します。

千代女の里俳句館 館蔵名品展
千代女の文展

3月30日(土)～5月12日(日)

千代女はその生涯の間に、実に多くの書簡を残しています。当時千代女と親交のあった、松任町の相河屋すへ女に宛てたものが一番多いですが、町外の俳人たちに宛てたものも少なからず確認されています。それらは千代女の実像に迫る重要な文字資料だけに留まらず、江戸時代の一般的な庶民生活の一端を窺い知る上でも大変興味深い歴史資料となっています。

本展では、江戸時代の著名俳人と謝蕪村編の『玉藻集』序文章稿や、津幡の俳人河合見風の句集『霞かた』序文章稿など、今回初公開となる資料7点を含む、千代女直筆による書簡や俳文の数々を紹介します。

白山市立博物館 スポット展示
**金栄健介の
ポタニカルアート―桜図―**

3月30日(土)～4月21日(日)

桜の開花時期にあわせ、花や樹木を極めて精密に描くポタニカルアーティスト（植物細密画家）金栄健介氏が描いた桜図15点を展示します。

白山市立博物館 企画展
**広報紙で振り返る
―平成はくさん物語―**

4月19日(金)～6月9日(日)

白山開山1300年、北陸新幹線金沢開業、白山手取川ジオパーク日本ジオパーク認定、白山市誕生、国民文化祭、石川国体などたくさんの出来事があった平成の30年間を「広報はくさん」と旧自治体1市2町5村の広報紙で振り返ります。

白山市立博物館 スポット展示
**ポタニカルアーティスト
 金栄健介が描く白山**

4月26日(金)～6月23日(日)

ポタニカルアーティスト金栄健介氏が「霊峰三山背くらべ」として白山、富士山、立山の歴史、文化等を描き新聞に連載されたシリーズのなかから白山に関係する作品を展示します。

石川ルーツ交流館
篠笛コンサート

4月21日(日) 午後2時～

15回目となります八木繁さんと粹音会による日本の情緒あふれる名曲を篠笛の演奏でお楽しみいただけます。

白山市立博物館
**「てつどうの広場」
 鉄道模型運行**

4月27日(土)～5月22日(水)

「鉄道のまち白山」のPRのため、今年も「てつどうの広場」で模型電車の運行を行います。広場に設置されたジオラマをNゲージの模型電車が走ります。4月21日(日)のほか6月16日(日)、8月18日(日)、10月14日(月祝)にも運行予定です。運行時間は各回とも午前10時から午後3時となります。

石川ルーツ交流館 企画展
**「絵と写真で楽しむ
 おかえり祭り」展**

北前船で栄えた当時の繁栄を物語る13台の台車と威勢のよいラッパを吹く青年団等に先導されて神輿が町内を練り歩く春の祭礼「おかえり祭り」。お祭りを題材とした切り絵や写真を展示します。あわせておかえり祭りの由来や台車の特色などを紹介いたします。

呉竹文庫 企画展
大正を振りかえる

3月5日(火)～6月2日(日)

当館が所蔵する史料の中から、大正時代を生きた文化人たちの書籍を中心に掛け軸、花器などを展示します。

◎美術館ローズコンサート
 4月25日(日)
 午後2時～2時30分

出演／上田 智子(ハープ)
 根来かなう(ヴァイオリン)

場所／松任中川一政記念美術館
 ◎俳句館たんぽぽコンサート
 4月25日(日)
 午後3時～3時30分

出演／谷内 直樹(ギター)
 中村 俊子(リコーダー)

場所／千代女の里俳句館

いしかわ・白山 風と緑の楽都
音楽祭2019 コンサート

◎博物館花束コンサート
 4月27日(土)
 午後2時～3時

出演／多田由実子(フルート)
 川原 由月(ヴァイオリン)

場所／市立博物館
 廣田 智美(ピアノ)

いしかわ・白山風と緑の楽都音楽祭2019の関連事業としてミニコンサートが白山市立博物館・千代女の里俳句館・松任中川一政記念美術館で行われます。いずれの会場も無料です。

平成31年度 展示・行事予定

事業計画	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
白山市立博物館 275-8922	企画展「広報紙で振り返る —平成はくさん物語—」 4/19～6/9 スポット展示「金米健介のポタニカルアート展」 3/30～4/21 ◆講演会等 ◆講座 ◆鉄道模型運行 ①4/21	スポット展示「ポタニカル アーティスト金米健介が描く白山」 4/26～6/23	企画展「HAKUSAN City コレクション展」 6/21～8/25	ミニ企画展「藤井信之農村絵巻Ⅱ」 7/6～9/8	8/7夏休み工作教室 ③8/18	企画展「館蔵屏風展」 9/13～10/14 9/15講演会	企画展示「石川中央都市圏考古資料展—中世編—」 10/16～12/1 ④10/14 10/14ミニSL・ミニ新幹線乗車会	企画展「くらしと道具のうつりかわり」 11/1～1/26 11/17講演会「日本刀の魅力」(仮称)	企画展「原幸水彩画作品展」 2/7～4/5	1/18・2/1・15古文書講座	3/8講演会	⑤3月中旬
千代女の里俳句館 276-0819	俳句館蔵名品展 3/30～5/12 立夏展示替		四季の俳句と写真展 6/8～8/4		西のぼるの仕事展 9/7～10/27 立秋展示替		俳句協会 会員展 11/1～ 11/17 立冬展示替	千代女・ 一茶交流 パネル展 12/7～ 12/22 新年展示替		俳画の愉しみ展 1/18～3/15 立春展示替		
松任中川一政 記念美術館 275-7532	春季テーマ展 「中川一政 薔薇とマジョリカ陶器」 3/9～6/2 4/25ミニコンサート 美術館講座「中川一政文集を読む」 ①6/8		夏季テーマ展 「中川一政 向日葵を描く —ファン・ゴッホを超えて—」 6/4～9/1 7/18～7/28 第25回花を描こう絵画展&歴史優秀作品展(市民工房うるわし)		臨時休館 8/4夏休みキッズプログラム「一政に挑戦! 油絵体験」 10/20・21 0歳からの家族鑑賞会「ミュージアムスタート」 10/21講演会「アートde子育て」	秋季テーマ展 「中川一政の書 画家の余技に非ず!」 9/7～12/1 ③10/12		冬季テーマ展 「中川一政の眼 墨蹟コレクションを中心に」 12/3～3/1 ④12/14		春季テーマ展 (内容未定) 3/3～	⑤2/8	
石川ルーツ 交流館 278-7111	企画展 「おかせり 祭り展」 4/27～5/22 4/21篠笛コンサート			7/7山中節を楽しむ会 8月上旬リサイクル工作教室 7月下旬ペットボトルを使ってグライダーを作ろう 7/20～8/25石川ルーツを探検しよう			10/27ヨシ笛コンサート					
呉竹文庫 278-6252	「大正を振りかえる」展 3/5～6/2 毎月、第1日曜日 あぐら茶会(1月、10月は休み)			(内容未定) 7/2～10/6 毎月第3日曜日 呈茶会(4月、5月、1月は休み)				(内容未定) 11/6～2/16 不定期 文化教室茶会		(内容未定) 3/3～6/14		
松任 ふるさと館 276-5614	4/29茶会			7/6ミニコンサート 7/7七夕茶会・句会 7/6・7「七夕夜灯」		9/14ミニコンサート 9/15月見茶会 9/14・15「月見夜灯」	改修工事のため休館(紫雲園のみ部分見学可) 7/1～			2/8雪見茶会		
鳥越一向一揆 歴史館 254-8020			企画展示「石川 中央都市圏 考古資料展」 6/22～7/15	企画展 「加賀一向一揆」(仮称) 7/20～9/23								◆歴史セミナー

※各館のイベント等は白山ミュージアムポータルサイト <http://www.hakusan-museum.jp/> で紹介しています。日程等が変更になる場合があります。詳細については各館までお問い合わせください。

白山ミュージアム

検索

